

ここでは、「座談会 学苑懐古」三、生徒数を新仮名遣いで表記し、1. 明治44年(1911年)の広島県公立諸学校の定員数など、2. 明治35年(1902年)の広島県女入学志願者と入学試験、3. 新入生と出身地、4. 広島県女の年度別募集定員数、競争倍数と生徒総数、5. まとめ、6. 参考・引用資料、を掲載します。

三、生徒数

築瀬 「はじめはごく小さい学校だった。2学級編成で4年制400人定員だった。39年が第一回卒業でしたね。」

久留島 「42年入学から150となりました。42年の4月には450いた。450から600それから1000、1200となりました。大正13年から5年制1200になりました。補修科は39年にできました。」【注1】

校長 「築瀬先生はいつから、大正3年10月からですか。久留島先生の卒業は。大正3年3月、そうすると入学は明治43年だったわけですね。」

【注1】下記の如く広島県女年度別生徒数・学級数を図2、3に、募集定員・入学者数を図4に示す。これらの資料によると募集定員が150人となったのは明治42年(1909年)ではなく大正5年(1916年)からである。明治42年の生徒総数などの記載は『広島県統計書』、『広島県年報』にはなく不明である。ただし本科・補習科の生徒総数が450人となったのは大正5年の459人からと思われる。大正13年(1924年)に4年課程が5年課程となったが、本科・補習科・専攻科の生徒総数は1132人であった。これらの生徒総数が1200人となったのは大正15・昭和1年(1926年)の1215人からである。

補習科、専攻科に関して、補修科は明治39年(1906年)本科とは別に新設された。同年3月卒業生徒にその後の補習教育をするためのもので、修業年限1ケ年、定員は100人以内であった。次いで大正9年(1920年)家事補習専攻科が新たに設置され、修業年限は3年間、生徒定員各学年50人ずつ150人であった。(『皆実有朋八十周年記念誌』昭和57年)

家事補修専攻科は昭和3年(1928年)広島女子専門学校に昇格した。(『皆実有朋百周年記念誌』平成13年)

1. 明治 44 年(1911 年)度の広島県公立私立諸学校の定員数など

付録

1 公立私立諸学校一覧

明治44年度
 本表学科ハ科目ノミヲ掲ク又教員欄ニ印ヲスルハ兼務者米字ヲ付スルハ米国人ニ係ルモノナリ

名 称	種 別	位 置	創 立 年	学 科	修 業 年 限	学 級 数	教 員		生 徒			
							男	女	男	女		
師範学校	広島県師範学校	県立	広島市皆実村	明治7年	本	科	4	1	24	—	293	—
	広島県三原女子師範学校	同	御調郡三原町	同 42	予本	科	1	1	1	—	89	—
中学校	広島県立広島中学校	県立	広島市国泰寺村	同 10	本	科	5	—	25	—	570	—
	同 福山中学校	同	深安郡福山町	同 20	補	習	6	—	13	—	491	—
	同 三次中学校	同	双三郡八次村	同 31	補	習	5	—	10	—	309	—
	同 忠海中学校	同	豊田郡忠海町	同 30	補	習	5	—	10	—	348	—
	同 呉中学校	同	呉市莊山田村	同 39	補	習	5	—	11	—	442	—
	私立明道中学校	私立	広島市竹屋町	同 29	本	科	5	—	10	—	377	—
	同日彰館中学校	同	双三郡吉舎村	同 35	補	習	1	—	10	—	293	—
	同 修道中学校	同	広島市竹屋村	同 38	補	習	1	—	13	—	524	—
	同 広陵中学校	同	同 前	同 40	本	科	1	—	1	—	29	—
高等女学校	広島県立広島高等女学校	県立	広島市下中町	同 34	本	科	4	1	11	9	395	5
	呉市立高等女学校	市立	呉市莊山田村	同 40	補	習	4	—	7	—	266	20
	尾道市立高等女学校	同	尾道市久保町	同 42	本	科	2	—	2	—	53	—
	町立福山高等女学校	町立	深安郡福山町	同 42	本	科	4	—	7	—	182	—
	私立山中高等女学校	私立	広島市国泰寺村	同 21	補	習	1	—	11	—	253	—
	私立西条実科高等女学校	同	賀茂郡西条町	同 44	本	科	3	—	3	—	20	—
	私立進徳女学校	同	広島市国泰寺村	同 44	選	科	3	—	5	—	468	50
										72	32	4
										—	—	115

表 1. 明治 44 年度広島県公立私立諸学校一覧

出典：『広島県統計書』〈明治 44 年～昭和 13 年(1938 年)〉 本資料の一部を使用

広島県女は広島県で初めての県立高等女学校であった。私立では明治 21 年(1888 年)創立の私立山中高等女学校と、表には示していないが、私立広島女学校（現広島女学院）があった。

2. 明治 35 年(1902 年)の広島県女入学志願者と入学試験

広島県女の修業年限は 4 年、1 学年の募集人数は 100 人であった。

入学志願者の資格は、年齢満 12 歳以上の者、高等小学校第 2 学年の課程を修めた者などであった。

入学志願者は 218 人、競争率 2.2 倍であった。私立の高等女学校在学中の生徒もいた。入学志願者の大半は広島市、広島県郡部の出身者であったが、他府県出身者もいた。『皆実有朋八十周年記念誌』)

最初の入学者選抜試験は、明治 35 年 4 月 10 日に行われた。

試験科目は国語、算術であった。

当時の広島女学校受験校に関して有朋 1 期生は次のように述べている。

「明治 35 年の春の事です。私が小学校の生徒でした。榎崎先生が毎日放課後、この
度創立される県立女学校の規則書を読んでもうくださいました。試験を受けてみましょ
うというものが組で 4 人。其の頃の新しい人達です。」

更に、試験当日に関しては、

「試験当日来てみると、まるでお御姉の様なのが、日本髪に結って帯をお太鼓に高く
しめている娘さんのようなのや、束髪にリボンをかけて海老茶袴をキッチリと済まし
込んでる人など沢山ありました。これにまず度胆をぬかれたのである。今の教務室の
辺りに薄暗い講堂があつて、其所へ集まる者三百余人。試験問題はよく覚えておりま
せんが、作文は母へ送る文というので私はなんでも首尾よく合格した通知文を書いた
と思います。」

と回想している。（『皆実有朋七十周年記念誌』昭和 46 年）

3. 新入生と出身地



写真 1. 明治 35 年(1902 年) 1 期生入学記念写真

出典：『皆実有朋九十年史』1991 年

4 月 12 日に合格者 100 人が発表された。新入生の学歴と年齢別人数および出身地は次の通りである。

学歴 高等小学校 4 年卒業 63 人

高等小学校 3 年修了 28 人

高等小学校 2 年修了 11 人

年齢 満 12 歳 25 人、 満 13 歳 26 人 満 14 歳 39 人 満 15 歳 9 人

満 16 歳 1 人

平均年齢 13.8 歳

出身地

広島市 52 人、安芸郡 11 人、安佐郡 7 人、芦品郡 2 人、 双三郡 2 人、豊田郡 1 人、

深安郡4人、賀茂郡1人、高田郡2人、比婆郡2人、佐伯郡3人、世羅郡1人、京都府1人、新潟県1人、岡山県1人、長野県1人、山口県3人、滋賀県1人、兵庫県1人、静岡県3人（『芸日日新聞』）出典：『皆実有朋百周年記念誌』

出身地は広島市52人、郡部36人と広島県内がほとんどで、他府県からの生徒は12人であった。

入学試験発表と入学した当時を有朋1期生は次のように記している。

「さて発表当日は今も昔も変わりなく胸をときめかして来たものです。うす暗い講堂に半紙を長々と継ぎ合したのへ、墨痕あざやかに姓名が書いてあります。…略…やっつと、自分の名を見つけた時の嬉しさは申す迄ありません。いよいよ学校が始まりました。合格者80名。何しろ県に1つの高等女学校、これこそ県下の才媛の集まりだったに違いありません。」（『皆実有朋七十周年記念誌』）

4. 広島県女の年度別募集定員数、競争倍数と生徒総数

明治時代後半から全国的に女学校への進学者が増加した。

広島県女は広島県で初めての公立高等女学校であり、開校当初から郡部、他府県からの入学志願者もおり、競争倍数は高かった。競争倍数の状況により入学者数を増していた。

1) 明治44年(1911年)から大正15・昭和1年(1926年)までの生徒数と学級数

年度	教員数			生徒数				学級数			
	男	女	計	本科	補習科	専攻科	計	本科	補習科	専攻科	計
1911年 (明44)	11	9	20	395	5		400	9	1		10
1912 (明45・大1)	11	10	21	400	20		420	9	1		10
1915 (大4)	11	8	19	386	13		399	9	1		10
1916 (大5)	9	11	20	444	15		459	10	1		11
1917 (大6)	9	14	23	515	14		529	11	1		12
1918 (大7)	9	18	27	561	18		579	12	1		13
1920 (大9)	22	23	45	625			625	14			14
1923 (大12)	19	20	39	891	17	114	1,022	18	1	5	24
1924 (大13)	22	18	40	978	14	140	1,132	21	1	6	28
1925 (大14)	23	18	41	966	22	154	1,142	21	1	6	28
1926 (大15・昭1)	21	20	41	976	9	230	1,215	21	1	6	28

(広島県統計書より)

表2. 広島県女の生徒数と学級数 出典：『皆実有朋八十周年記念誌』

本科の入学試験競争倍数の増加に対応して応募定員と学級数が増加した。大正 13 年 (1924 年) 4 年課程から 5 年課程になり、本科の生徒数は 978 人、学級数は 21 となった。
(『皆実有朋百周年記念誌』)

大正 15・昭和 1 年には生徒総数 1215 人 (本科 976 人、補習科 9 人、専攻科 230 人) であった。

なお『広島県統計書』には記載がないが、『広島県年報』によると明治 39 年(1906 年)・40 年(1907 年)・43 年(1910 年)の学科、生徒数と学級数とは表 3 の通りであった。

	学科	生徒数	学級数
明治 39 年	本科	330 人	8
	補習科	10 人	1
明治 40 年	本科	334 人	8
	補習科	115 人* (*15 人の間違いか)	1
明治 43 年	本科 補習科	2 科合わせて 374 人	2 科合わせて 10

表 3. 明治 39・40・43 年の生徒数と学級数 出典:『広島県年報』

2) 明治 44 年(1911 年)から昭和 18 年(1943 年)までの募集定員数、入学志願者数と競争倍数

年度	募集定員	入 学 志 願 者	合 格 者	競争倍数
1911 年 (明 44)	100 人	237 人	97 人	3.8 倍
1912 (明 45・大 1)	100	403	98	4.1
1915 (大 4)	100	408	96	4.3
1916 (大 5)	150	507	148	3.4
1917 (大 6)	200	536	195	2.7
1918 (大 7)	150	471	138	3.4
1920 (大 9)	150	651	165	3.9
1923 (大 12)	250	784	244	3.2
1924 (大 13)	250	923	250	3.7
1925 (大 14)	250	861	250	3.4
1926 (大 15・昭 1)	250	790	249	3.2

(広島県統計書より)

表 4. 明治 44 年から大正 15・昭和 1 年(1926 年)の募集定員数、入学志願者数と競争倍数

出典：『皆実有朋八十周年記念誌』

大正4年(1915年)、競争倍率が4.3倍となり翌年(1916年)には148人、大正6年(1917年)には195人が入学した。大正9年(1920年)3.9倍の競争倍率となり翌年に募集定員を250人としていた。(『皆実有朋八十周年記念誌』)

広島県女受験について有朋8期生(明治42年(1909年)入学)は次のように記している。

「入試に合格したのは6年卒で私と他に2人、高等科でも3人という誠に厳しいもので、その時の嬉しさは全く例えようのない喜びでした。」(『皆実有朋九十年史』)

また有朋11期生(明治45年(1912年)入学)は合格発表時の様子を次のように回想している。

「受験番号と姓名を墨で鮮やかに書いた合格発表、4人に1人という開校以来難関突破の優等生揃いである。」(『皆実有朋六十周年記念誌』昭和36年)

明治・大正時代、広島県女は受験難関校であった。昭和に入って志願者数と競争倍率はどのように推移したのであろうか。

次に広島県女の昭和3年からの年度別募集定員数、志願者数、競争倍率を示す。

年度	募集定員	志願者	合格者	競争倍率
昭和3年(1928年)	250	638	250	2.6
昭和4年(1929年)	250	661	248	2.7
昭和5年(1930年)	250	732	248	3
昭和6年(1931年)	250人	670人	249人	2.7倍
昭和7年(1932年)	250	760	250	3.1
昭和8年(1933年)	250	843	249	3.4
昭和9年(1934年)	250	800	250	3.2
昭和10年(1935年)	250	850	250	3.4
昭和11年(1936年)	250	847	250	3.4
昭和12年(1936年)	250	899	249	3.6
昭和13年(1937年)	250	939	254	3.7
昭和14年(1938年)	250	1,017	260	3.9
昭和15年(1939年)	250	688	255	2.7
昭和16年(1940年)	250	583	262	2.2
昭和17年(1941年)	250	492	260	1.9
昭和18年(1942年)	250	469	260	1.8

表5. 昭和3年(1928年)から昭和18年までの募集定員数、入学志願者数と競争倍率

出典：『皆実有朋八十周年記念誌』

昭和に入っても入学志願者の競争倍率は上昇し昭和3年の約2.6倍が昭和8年には3.4倍となっていた。

上記の表4, 5にあるごとく広島県女は開校以来、明治、大正さらに昭和においても極めて受験難関校であった。

広島県女の競争倍率が昭和16年(1941年)頃から若干低くなってきたが、これは当時広島県女への入学希望者が増加し、昭和16年に県立女学校を1校増し2校としたことと関係があると思われる。県立女学校の新設により広島県女は広島県立第一高等女学校と改称し、新設した学校は広島県立第二高等女学校と称した。

5. まとめ

広島県女は県下ではじめての公立女学校であった。受験生の大半は広島市、県郡部出身者であったが県外からの者もいた。明治、大正、昭和を通して入学競争倍率は高く、受験難関校であった。募集定員数は開校当初から年に100人、4年課程で生徒総数は約400人であった。大正5年(1916年)から応募人数が増加したため募集定員数は150人となり、大正9年(1920年)の本科の生徒数は625人となった。更に大正13年(1924年)から5年課程となり、大正15・昭和1年(1926年)の生徒数は、本科975人、補習科9人、専攻科230人であり、生徒総数は1215人であった。昭和3年家事補習専攻科は広島女子専門学校に昇格した。昭和3年以降の広島県女年度別生徒数は1200人台で推移した。

6. 参考・引用資料

『皆実有朋八十周年記念誌』昭和57年、『皆実有朋百周年記念誌』平成13年、『広島県統計書』(明治44年～昭和13年)、『皆実有朋七十周年記念誌』昭和46年、『皆実有朋九十年史』1991年、『広島県年報』(明治37～40年、43年)、『皆実有朋六十年周年記念誌』昭和36年